

抗がん薬治療における地域医療連携 (薬薬連携) 推進に向けて

松井 礼子[†]第72回国立病院総合医学会
(2018年11月10日 於 神戸)

IRYO Vol. 75 No. 3 (229-232) 2021

要旨

昨今、がん化学療法は外来へとシフトし、保険薬局においても抗がん薬の支持療法薬や、経口抗がん薬が含まれる処方せんを応需し、患者への交付、副作用管理を行う機会が増えつつある。以前より、病院側からの外来患者個々の治療に関する情報の連携が各病院、各地域単位で推進が図られてきた。そして近年では、先進的な取り組みとして保険薬局より在宅治療中の患者情報を病院へ連携する取り組みも始まりつつある。本来の地域医療連携(薬薬連携)の目的は、病院と保険薬局の薬剤師が双方に連携し患者のシームレスな薬学的介入を行うことである。保険薬局と医療機関との連携の研究として国立がん研究センター東病院(当院)において、厚生労働科学研究費補助金、医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬剤師が担うチーム医療と地域医療連携の調査とアウトカムの評価研究」の一環である、プロトコルに基づく経口抗がん薬治療管理の効果を実証する調査を実施した。本研究は外来でCapeOX療法またはSOX療法を開始する患者に対して保険薬局薬剤師が在宅治療中の患者の副作用評価を行い緊急性が高い事例は迅速に対応し、その他はトレーシングレポートを用いて病院に共有する取り組みについてを評価するものである。保険薬局からの報告は50名、211件であった。Grade 2以上の副作用に対し、経口抗がん薬の休薬に繋がった症例は2例あった。医療機関と連携し、在宅治療中患者の副作用に迅速に対応をしたことで副作用の重症化を回避することができた。この研究を経験し、当院の施設状況を踏まえた形に調整した上で、保険薬局からの情報提供の応需と対応を継続して行っている。本シンポジウムではその研究の詳細と当院の取り組みについても報告を行った。

キーワード 薬局, がん化学療法, 外来患者, 経口抗がん薬

はじめに

昨今、がん治療は外来へとシフトし、保険薬局においても抗がん薬の支持療法薬や、経口抗がん薬が含まれる処方せんを応需し、患者への交付、副作用管理を行う機会が増えつつある。以前より、病院側

からの患者個々の治療に関する情報の連携が各病院、各地域単位で推進が図られてきた。そして近年では、先進的な取り組みとして保険薬局より在宅治療中の患者情報を病院へ連携する取り組みも始まりつつある。本来の薬薬連携の目的は、病院と保険薬局の薬剤師が双方に連携し患者のシームレスな薬学

国立研究開発法人国立がん研究センター東病院 薬剤部 [†]薬剤師
著者連絡先: 松井礼子, 国立研究開発法人国立がん研究センター東病院 薬剤部
〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1

e-mail: rmatsui@east.ncc.go.jp

(2019年5月7日受付, 2020年11月13日受理)

Promoting Cooperation between Hospital Pharmacists and Community Pharmacy Related to Cancer Treatment
Reiko Matsui, National Cancer Center Hospital East, Chiba, Japan

(Received May 7, 2019, Accepted Nov. 13, 2020)

Key Words: community pharmacy, chemotherapy, outpatient, oral chemotherapy